

中国のほんの話 (50)

## ある書評家の書店めぐり ～「読書週間」に寄せて～

蔭山 達弥

携帯電話の普及、電子図書の登場で、わが国ではCD（レコード）や紙媒体の書籍の売り上げが下降線の一途をたどっている。とはいえ、公共交通の車内で読書にいきそんでいる人々は多い。一冊の本との出会いが、その人のその後の人生を変えたという話もよく聞く。2003年7月20日の『北京晩報』に、「これは一部の北京の書店の不完全なハンドブックである。」という書き出しで、6ページにわたって北京の書店の特集記事が組まれた。秋の「読書週間」に向けて、この特集記事の中から書評家・黄集偉のエッセイを紹介しよう。

「私はスローな人間だ。書店をぶらつくことは私の淡白な生活の中で最も重要なものの一つである。長い時間を経て、書店の新刊の品数の多さが私の唯一の強い関心ではないことに気付いた。逆に、店先が埃をかぶっていて、店員が無表情で、多くの時間の経った古い書籍が隅っこにある書店は、ほとんど時と共に進んだ跡が見られないが、ロケットのような速さとリュック族の遅さがこの時代に必要なのと同様に、スローにはスローの良い所がある。

読書はどんどん読み飛ばすこともできるし、同時にじっくりと読んでもよい。このことを書籍の品質或いはタイプに換算すると、つまり流行の本はあつという間であるが、古典となっている本は常にスローであると言える。ある書店で新刊書が山のように積み、あふれんばかりで見切れない気にさせるのも結構だ。しかし、私が言うそれらの書店のスローさは、気持ちを落ち着かせる。その死んだような書店の中から一冊のよく知られた大作を見つけることもできるし、ほこりがうず高いその隅から一冊の思いもかけない収穫を引っ張り出すこともできる。こういったことはスピーディだとなかなかでき難いものだ。

何年も前、私はあちこちである本を買うように頼んだが、遂げられなかった。ある時、大型書店で探し回ったが、見つからない。別の大型書店で店員を説得して、彼女たちのコンピュータで作者名、出版社、書名を検索したが、それ

でも見つからなかった。

瞬間に、数年が経過し、そのころ是非とも読みたいという衝動をほとんど忘れていた。ある時、外へ仕事に出かけ、お昼には早いので、灯市口景山学校南門の外にある学生に補助教材を専門に売っている小さな店をぶらつくことにした。退屈して、店になかの狭い通路を歩いてた。すると突然、一山の習字の手本の下に、なんと三冊の古いあの本が置いてあったのだ。その異郷で旧友に会ったような感覚は、今になって思い出してみると、興奮してぞくぞくする。その三冊はすべて私が購入し、一冊は自分で読み、二冊は友人にプレゼントした。その二冊の本を贈ってもらった者は今になっても、酒や飯をご馳走してくれない。何年も経つのに、どういう訳だろう。

このように個人の体験は、私をより一層「スローな書店」に目を向けさせる。スローにはスローの良い所があり、スローにはスローの道理がある。しかも、スローの中に下らない楽しみを見つけられる人は、絶対に自分がスローだからと言って、卑屈にはならないことに、私は気付いた。死と相対して生があるのと同様に、愚かな「スロー」がなければ、火のような「スピーディ」も存在しないからである。」

今から7年前の一文であるが、読書好きな方なら、このような経験をお持ちの方もきっとおられるだろう。二十世紀の初め、あるイギリスの蔵書家が妻子を連れて、エジプトに旅行したが、途中で引き返した。その理由は「ナイル河はすでに何世紀も流れている。しかも、絶え間なく流れ続けている。しかし、ロンドンには収蔵を待っている書物がある。」

二十一世紀の北京には、渴きを癒す水を求めるように、書物を求める人々は依然として積極的に活動している。彼らが追い求め、選択する書店は彼らの足下に伸びている。書店は彼らにとって自宅、職場（学校）に次ぐ第三の居場所であり、そこは「精神の庭」である。

かげやま たつや（教授・中国文学）